

ゆづな歳時記

七月二十三日「みなものかじ」

登場人物

この回の登場人物



堤 夏生 御蔵橋中学校1年1組に通つ、豆腐屋の一人娘。水泳が何より好きな、ショートカットの元気少女。基本的にはまっすぐで快活かつ能天気な性格だが、突っ走りすぎて幼馴染の慎吾に迷惑をかけていることを内心気にしている節も

伊沢 慎吾 堤夏生の幼馴染で、休部になっている水泳部を夏生が再立ち上げたときに手伝わざれ、泳ぐわけでもないのに水泳部の副部長をしている。朴訥で真面目な性格ゆえに夏生との小さないさかひが多いが、夏生のことは本人いわく「弟のようなもの」と、常に気遣いを見せる。



磯谷先生 御蔵橋中学校3年1組の担任。水泳部の顧問を引き受けてくれた、本校なベテラン先生。

若木 ゆずな 御蔵橋に住む中学一年生の少女。ちんまりとしたおさげ髪とどんぐりまなこが特徴。早くいちにんまえの大人になりたいと願うが、そそっかしさからの失敗も多い。

兩宮 旬 御蔵橋に引っ越してきた少年。おっとりとした繊細な風貌と物腰を持つが

八重垣 縁里 ゆずなの中学校のクラスメイト。古風な丸眼鏡をかけており、けだるげで淡々とした言動を常とする。クラスの影のご意見番。

小野寺 陽子 ゆずなのクラスメイト。押しの強さと行動力を持つクラスの中心人物だが、意外と足元がおろそかで、八重垣 縁里にはよく隙をつかれて防戦一方になる。

相羽 響 ゆずなのクラスメイト。小学校まで海外に暮らしており、いささか硬い物言いと凜然とした雰囲気を持つ。接骨院と武術道場の養子。

鹿島先生 ゆずなたちのクラスの担任の先生。

「……あ」

ざばざばと水音が響く、給水中の25メートルプール。

バスタオルを足元に取り落として、堤夏生はぼかんと声をあげた。

呆然としているのは、夏生だけではなく。その後ろでは慎吾もまた、目を見開いて夏生と同じほうを見る。

満水も近づいたプールの角。滝のように水を吐き出す給水口の、その真下の水面を。

「……」

ひとたび慎吾の顔を見て、それから夏生は再びプールにまなざしを戻す。落ちたタオルを拾うことも忘れ、紺色の学校指定水着の胸元に手をあてて。

無理もないといえば、無理もないことだった。

夏休みも3日目の、午前十時。水泳部の活動のために、いつものように二人で学校にやってきて。プールサイドに上がったとたんに、いきなりこの光景を目の当たりにしたのだ。

プールの角の水面、注水口からの水に打たれて、くるくると回るバスケットボールほどの球体。

目まぐるしく動く表面に見えるしましま あ、黒と緑の色合いはまさしく。

「……すいかだ」

震える声で呟くと、夏生はちいさな肩をちごこませ、なだらかな胸の前に両のげんこつをぎゅっと握りしめた。

「すいかだよ、慎吾！」

馬鹿みたいな夏生の声に、慎吾は頷いた。いや、まあ、それは俺もわかってる。わかっちゃいるが、問題はどうしてあんなところにあんなものがあるのかということだ。

「夏生。ちよつと待つてる、俺、今職員室に聞いて

あ？」

隣の夏生にかけた言葉は、途中で呆けた声に変わった。なぜなら、夏生はすでにそこにはおらず

たばあん！ と水面を叩く音に続いて、大量の水飛沫がプールサイドの慎吾のところまで飛んできた。

朝一番、給水したての水はまだ、肌を刺す冷たさだ。

「……っ！ 馬鹿、夏生ちよつと待てて！」

慎吾の声など当然聞いてはおらず、夏生はロケット花火めいた勢いで水面を泳いでゆく。

プールの中央あたりで潜水し、しばしの間を挟んで。給水口の下、水面からよつきり突き出た手が件の球体をつかんだ。

浮上した夏生はなにやら難しげな表情で、黒と緑のしましま

を丹念に眺め回す。ゆっくりと回しながら、曲芸のイルカよろしく、頬をつけ、鼻をつけ、てのひらで叩き

水着の胸にぎゅっと抱くと、夏生はまんまるに目を見開いてこちらに顔を向けた。

「すいか！」

ああもう、そんなことは分かっているってんだこのバカが！

思わず盛大なため息をつきながら、しかし慎吾は再び首を傾げる。

それはともあれ、なんでプールにすいかが浮いているのかという根本的な問題は依然として解決していないわけ。

途方にくれる慎吾の耳に、給水の音が遠くざばざばと聞こえてくる。

(お試し版はここまでの掲載になっています)